

どもの言い分」(亀谷健樹編)という本を読んだが、その本の言葉の七十パーセントは子どもが体をおいて生きている場面の感触を伝える本物の子どもの言葉だ。「おとなの手」をちょっとはずしてみただけで、親や教師、さらにはシステムにぶつかっている子どもたちの力をイメージできる。森下計二というばくの敬愛する小学校の先生がたくさん本を書いてあるが、かれの報告しているかれの教え子たちの様子にもはくの心は揺さぶられる。そうしたものにふれているだけで、なんだか熱くなってくる。子どもという存在にこの世のシステムの残酷さが集約されてあらわれているとかいっても、それでおさまりがつくわけではなく、子どもはもっとすごいもの、生の不安そのものなのだということであらためて知るのだ。

とにかく、学校がおかしくても、世の中がだめでも、自分が日常的に出会う子どもから「よろこび」をひきだしたいと思う。多くの場合、自分がただのおとなとして、そういう余裕がもてる健康状態であること、自分が生まれかわって子どもになったときに会ってラクだと感じるような人間になることが大切で、一般的なことはとりあえずどうだっていい。

れている。しかし、かれが「東洋体育」をおしてみつめている宇宙が、たとえば吉本隆明を教科書的に読んで金縛りにあったように肩を凝らせ、周囲にけわしい気配をただよわせている人物のいる場所(ちょっとどぎつい言い方をしてしまったかもしれない)なんかよりはずっと快く、新しいエネルギーの源泉たりうることは認めるべきではないか。

とにかく、どんな知識、正義、美意識が優勢になっている場所であろうと、「きつーい冗談」をしつこくいいあってやっつとバランスのとれるような、陰性の緊張がはたらく場所にはたまらない。そういう緊張が学校にも社会にも瀰漫している。それを体からほぐしていきけるというのは、最近、ますます実感していることである。そして、自由な体の動きのためならばらしい教師は、なんといっても、学校へ行くまえの幼児である。その幼児までがおかしくなっているという現実も一方にはある。

ここまで書いてきて、どうも、気恥ずかしくなってきた。教育的な問題について意見をいうのは実にたやすいことだからだ。現状がだめなことだらけなんだから、どこを突いてもいくらでもいえると思う。大切なのは、いままでもなく、自分の現実の日常の場面です。

れだけのことができるであろう。

はくは学校がいやでいやでしかたなかったくせに、普通の世間に出て働くという踏ん切りがつかないままにズルズルと大学院生(四年間、そのあいだ塾でバイトしていた)、高校教師(二年間)、大学教師(七年間)と学校と教育にかかわって生きてきた。それその段階で、こんなところで意見を吐くなんてとんでもないというくらいのはかきかげん、だめさかげんを發揮してきたと思っっている。腰が痛い、背中が痛いといふうちに疑りをつくりながらだ。高校教師時代はとくに大変だった。その経験についてはまだ気楽に書けそうにない。いま、多少とも成長したというか、ほぐれてきたといえるのは、こうして教師をやっていることを「うしろめたい」なんて思わないようにしていることだ。べつにうまいリクツが閃いたというわけではなく、どんな場面にせよ、そこにいることが「うしろめたい」と感じる人間がいることは周回の雰囲気を知るだけだとわかったからだ。

いまは大学生に主に英語を教えているわけだが、英語にたいしてどれだけリラックスしてつきあえるかが問題なのだ。学生にいつている手前、まず自分ができるだけすっきりと教室の中に、英語の中にはいる必要がある。

もちろん、なかなか簡単にはいかないし、やる気になったぶんだけ内側でひっかかってくるものも出てくるが、ほとんど明るくなってきているのは確かだ。いまの大学生はつまらないという話はよくきく。どうでもいいようなところばかりおとなになって、存在の部分、部分がチグハグになっているのが痛々しかったりもする。それでも、かれらを相手に授業をしていて、けっしてわるい気のしないかたちで、子どもに出会い、おとなになろうとする努力に出会い、ときにはしっかりとらしたおとなにも出会い、はっとさせられる。授業にはかならず制度の枠からはみだす感動やよろこびがあるはずで、それに敏感になれるように教室では解きはなてるものは解きはなっている。たいとまじめに考えている(スウィングする授業という言葉を高校教師時代に思いついて、それが漠然とした夢としてはくの中にいる)。これぐらいのことしかいえない。そして、これぐらいのことと同僚の教師たちに語ったことはない。

はくは教育テレビの「思いっきり中学時代」が大好きで、そこに出てくる中学生たちに手ばなしで感心してしまう。NHK名古屋でつくられている「中学生日記」でも、本物の子どもの不器用さが、つくろった結びからのぞくようにあらわれてくることに感動する。「子

子どものこと……は、おとなが悪い

——いじめ・初等教育・もろもろについての社会学的考察集——

橋爪大三郎

子どものこととなると、つい興奮してしまふ。あれもこれもと、言いたいこと、言わないうとおさまらんことだらけでほんとに困るが、要するにこれは、おとなが悪い。という問題にするのがほんとうだけれども、常識的な線で丸めておいた。

あの有名な『あんかるわ』までが、へこども特集だという。そしてなんと、私にも原稿依頼がまわってきた。弓立社の宮下さん、ご紹介ありがとうございます。原稿料のないのがちと玉にきずだが、なにかまうもんか。菊屋の瀬尾くんも書いてたし。それにせいか、読者の六割がたは学校のセンサーや関係者じゃないかという予感(大いにありそう)も手伝って、ワープロを打つ指先に思わず力が入る次第です。

かく言う私、ふだん「学術論文」ばかり書いている。しよっぱな「問題の所在」などと緊張したりするわけですが、そんな悠長しては間にあわない。この際だ。出たところ勝負でいこう。頭のなかのようまとまらん渦巻きを片端からちよんぎっては箇条書きに、しばらくならべて参りやす。整理番号と、ついでに付録のコメントをつけときますんで。

その① 《いじめだなんだと言うけれど、子どもはほおつとけばほかの子をいじめたりなんかするもんなんで、それくらいでおたおたするほうがどうかしてる、要するにこれはおとなの問題なのだ》とゆーこと。……コメント……たとえばこう言う、とかくおとなは分かったように返事するもんですが、こいつ

が曲者。「どうかしてる」おとなほど、自分で「どうかしてる」とは思わない始末のわるさ。彼らのあたまはカボチャです。

その⑧ 《「いじめでなぜわるい？」と口ごたえされて、ウツと一瞬詰まったり、「だって可哀そうでしょ」「相手の気持ちになりなさい」なんて言ったりしてやるようではでんで失格。いじめがなくなるはずがない」とゆーこと。……コメント・理由を言えばなんとかなると思う(そんな発想しかない)ところが、救いがたい。正解は、「このおれが許さん」と叫んで相手にとびかかること。(これ以外にも正解あります、念のため)。

その⑨ 《「いじめ根絶」などと、目の色を変えなさんな。要は、いじめを経験したときどう行動するのが正しいか」を、ケース・バイ・ケースで子どもがちゃんと学べればいいんだ」とゆーこと。……コメント・おとながおとなをいじめるぐらいだから、子どもだって子どもをいじめる。いじめは悪いに決まってるわけで、それが倫理・道徳というものです。どんな社会も例外なし。特にわれわれのばあい。これは、人権と法の思想とよばれております。このルール(いじめに抗する文化)を子どもがどう身につけるかが課題なんです。これと、ともかくいじめをなくそう式、とんちんかん無菌衛生思想ほど、似て非な

るものはござんせん。

その④ 《いじめはたいがい、いじめの当人たちの問題にされてしまうが、どっこい、ポイントが第三者にあり。たまたまいじめを見聞きした第三者こそ、本当の当事者なのだ》とゆーこと。……コメント・このポイントをつまえないのは、みんなけしからん「高見の見物」いじめ論で、はっきり言えばいじめられる者の敵。本当の当事者とは、「良心」に従ってふるまえるかどうかを問われるそのひと、といういみなんだ。その「良心」ですが、これはいつもたつたひとりの孤独な跳躍です。かわいそうにねえという共感の心情なんかではなくて、われわれは良心を、社会的な行動様式の一つとして、苦勞のすえ身につけるのです。

その⑤ 《「みんな仲よく」という発想こそ、集団いじめの元凶なのだ》とゆーこと。……コメント・おとなの社会が、利害の対立や紛争を織りこんでいるのは当然でしょ。そのルールである人権と法と秩序を学ぶのに、「みんな仲よく」なければ気がすまないメンタリティで、つとまるわけがない。なのに今でも「喧嘩両成敗」(中世法)ですませるクラス担任がいたりするんだから。生徒は教師の家来ですか？人間なら、大勢だつて間違える。正義が少数派なんてたしよっちゃう

だ。そのとき口をつぐみ、事を荒立てなかつたら、だれがルールを守るんすか。「人の和が後生大事」では、そうした少数者を集団で排斥しようとするのがおちでしょうが。

その⑥ 《「なんでも話しあいで解決しよう」とか言うもんだから、子どもにおとなの「政治バカ」「権力音痴」が伝染してしまい、いじめにも輪をかけている》とゆーこと。……コメント・討論による紛争解決は、超高級技術。おとなにも難しいのに、子どもが自然にできるわけがない。教師の出番です。だが彼の誘導は語法やルールについてだけでよいので、結論を誘導しちやいけない。それに、判定者(教師)の存在は、話しあいの埒外にある権力的状況。自分の発揮する権力や強制に無自覚なおとなに限って、自分に都合のよい結論がでるまで「話しあい」を続けさせる癖がある(ひきまわし)。相手が自分の意見を持つことを認めない、独我的暴力。こういう環境では、子どもは自分の意見に対する自負と自尊心を見失いますよ。

その⑦ 《「いのちを大切に」「やさしきと思ひやり」「相手の気持ちを汲みとって」などと百遍繰り返せば、いじめは百倍深刻になる》とゆーこと。……コメント・「いのちを大切に」思う「やさしきと思ひやり」あるひとが「相手の気持ちを汲みとる」からいじめな

い、というのでは、その行為は、当人の恣意(相手への恩恵)ということになっちゃうでしょ。この感覚・この発想がいじめの温床なんだよ。子どもの価値観にアップルしようというスケベ根性があるうちは、教育なんかできっこねえダロ。肝腎なのは、当人の恣意にも服さない、ましていわんや他人の手の届かない、いのちよりも値打ちある(人間の尊厳)というものがあるんだ、ということですよ、めいめいに。もちろんこれは人為的な制度なんです、自分が信じるしかないもんです。これを口で教えるのはほとんど不可能だ、と気づくのが先決でね。

その⑧ 《いまのいじめをどうかしようと思ふなら、まず親やおとなが脳味噌が裏がえしにして丸洗いにするくらい頭の洗濯をやつて、「こりゃいじめどころでない、もつとえらいことが沢山あるわい」という殊勝な心境になり、目から鱗が落ちて、自分の日常のほうもいちから点検しなおすようでない、話にもなんにもならない》とゆーこと。……コメント・洗濯のやりかた？そりゃ私の書いたものを読むことですね。それでも解らないひとは、月謝次第で私の特訓を受けられるかもしれない。

先もまだあるので、いじめについてはぎ

とこのくらい。診断すれば、これは子どもの

アノミー(無規範状態)の一種なんです。かの「自殺論」の大家、デュルケム先生の仰るごとく。《構造主義》派のはしくれとしては、これを引用しとかないときまにならない。図式・いじめアノミー→自殺。ねっ、うなづけるでしょう。

つぎに、初等教育の巻。小・中学校のへんてこなところをあげてみよう。これまた沢山ありすぎて、ついにコメントのほうは省略。残念ですが。こんな学校にもう通わなくていいから、私あ本当に幸運ですわい。

その⑨ 《学校は、普通教育を身につける、最低限の社会生活のルールを身につけるといふ、ただそれだけのところなのに、勘違いしている親や教師が多くて困る》とゆーこと。……コメント・略(以下同様)

その⑩ 《教育権は親にあるのに、親は文部省が教育するものと錯覚し、文部省は文部省で教師をコントロールすることばかり考えて(つまり親を信頼しないで)、話がごちゃごちゃだ》とゆーこと。

その⑪ 《親は教育に文句があれば、自分で学校をつくればよいのに、塾ばかりできるのは、「みんなの行く学校はテキストでいいから、自分の子どもだけはかの子より出来て

ほしい」という考えなのだ》とゆーこと。

その⑫ 《もひとつ、決定的にまずいのは、親も教師も、人格(ないし人間の価値)と学力とを区別できないため、子どもが勉強が得意ないとパニックに陥り、学校も教育機関としてうまく機能できなくなっている》とゆーこと。……ここだけコメント:「試験の成績だけで入学を決めると片寄るから、全人的評価が望まれる」なんて言うのがある。ドアホー人が人を「全人的に評価」したりしたらあかんのや。試験はまぐれがあるさかいええのやんか。

その⑬ 《成績は個人々人のものなのに、学校を共同体と勘ちがいがいるため、全員に同じ成績を与える(全員卒業させる)圧力が生じる。そのしわ寄せから、学校間格差が生産され、そこからさらに受験制度が派生してくる》とゆーこと。

その⑭ 《学校を共同体と考えると、子どもを学校共同体への貢献で評価することになるが、これが相対評価、すなわち「日本人」になるための訓練成果のいみをもつ》とゆーこと。

その⑮ 《子どもが学ぶべきなのは、市民社会のルールだけでよいのに、学校(共同体)ごとにちまちましたわけのわからん規則が定まっいて、そのつどそれに従わないといけ

ない、という絶望的な状況がいまの学校だ」とゆーこと。

その(16) 《子どもは規則の制定や規則の必要性を学ばないと、自由についても理解できない》とゆーこと。……ここもぜひコメント：教師はあからさまな強制を嫌うが、自由と強制が両立しないと誤解しているに違いない。強制や禁止は断固必要で、さもないと自由も成立たなくなる。最小限の、有無をいわせぬ公平な、どこからどこまでが輪郭の明瞭な強制。それに触れさせなければ何をしてもよいという経験が、自由なのである。

その(17) 《子どもの規則は、おとなの規則でもあるべきで、子どもだけが守る規則は親や教師が管理のために考えついたくたならぬ規則にきまつてゐる》とゆーこと。

その(18) 《詰めこみ反対とかで、低学年で暗記を軽視するのはとんでもない》とゆーこと。

その(19) 《漢字の読み書きを一度に教える愚劣な「学年別漢字配当表」はやめにして、ルビを活用しながら、読みだけ先に（書きはあとから）教えるべきだ》とゆーこと。

その(20) 《作文はいいが、子どもに詩や読書感想を書かせたり、作文コンクールみたいなまねをしたりしてはいけない》とゆーこと。
その(21) 《ローマ字、道徳の時間、低学年

せつかくだからなるだけ簡条にしとこう。

その(31) 《日本人は子どもを弱者と捉え、保護しつつ干渉するという力関係の場を巻きこんでしまう。しかし民主主義は本来、当事者の力関係に決して左右されない絶対的なものがある、と信ずることだ》とゆーこと。

その(32) 《民主主義の話し合いのルールとは、自説を譲ることではなくて、相手の意見とことん最後まで聞くこと。そして多数決とは、全員一致も暴君もなしですすため、少数意見をちゃんと記録に留めておき、状況が変わればこんどはそれに従う余地を残しておくことだ》とゆーこと。

その(33) 《国家は、われわれが現在している、殺人を正当化できる唯一の社会装置である。そしてもし、国家もなしですすまそうとすれば、「あなたの愛する人びとをむごたらしくもみな殺しにする殺人鬼にどう対処するか」、あなたが身をもって示さなければならぬ》とゆーこと。

その(34) 《民主主義とは要するに、ふつうのひとつとが正当な国家と政府を樹立するための手続きなのだ》とゆーこと。

その(35) 《民主主義は人間の本性にいちいち逆らう、人工的で不自然な制度なのだ》とゆーこと。

の理科・社会は不要である》とゆーこと。

その(22) 《へんな経験・観察主義、身のまわり主義みたいな「理解のやらせ」はやめにして、肝腎の理屈をさっさと教えるべきだ》とゆーこと。

その(23) 《小学校の高学年は教科担任制にすべきだ》とゆーこと。

その(24) 《学校運営に自由競争原理を導入すべきだ。具体的に言うと、学区自由制、教育委員公選、教員の年俸契約制、校長の教員人事権、学校設置基準の緩和、などを実現すべきだ》とゆーこと。……ここもどうしても、

コメント…自由な競争社会で、どうして学校だけが例外なんだ！ どんなに手抜きしようど地位は安泰、待遇もおなじなら、誰が本気を出すもんか。ぬるま湯の別天地。社会のルールについて基礎訓練を施されなければならぬ子どもが、いちばん世間知らずのおとな達に預けられ、隔離されたプロイラー的環境にとじこめられる不自然。教育に関するあらゆる錯覚の温床。もちろん日教組にも退いてももらいます。

その(25) 《教師はまちがっても、子どもの「ともだち」になつたりしてはいかん》とゆーこと。

その(26) 《教育の効果はおとなが見ていないでも子どもが自分でやっていけるところに

その(36) 《そんな民主主義の行動原理を得ることが、学校の公民教育のすべてだ》とゆーこと。

その(37) 《しかし日本人は、民主主義を、伝統的な共同体原理とすぐとちがえてしまふ》とゆーこと。

その(38) 《戦後民主主義は、自発性を演出するアメリカの、やらせ》であった。おかげで、日本人は、思わずしらすダブル・バインドにおちこんでしまった》とゆーこと。

その(39) 《戦後民主主義下の日本資本制は寄生虫的に特殊能化することで、戦後世界の一番うまい汁を吸いつつ巨大に肥満したが、いまやそれがそのまま巨大な問題になり変わってしまった》とゆーこと。……。

ある。いちいち子どもを見張ろうとしてはいけない》とゆーこと。

その(27) 《子どもの自発性を演出するな》とゆーこと。

その(28) 《学校行事なんかは派手じゃない》とゆーこと。

その(29) 《子ども同士の人間関係におとなが介入してはいけない》とゆーこと。

その(30) 《公共教育は、子どもの生活様式（食習慣・信仰・服装……）を規制してはいけない》とゆーこと。

具体的なケースをみていくと、親も教師も子どもなんとも異様な行動様式を示している、啞然とさせられる。簡条はまだまだ沢山あるが、残らず列挙してもしかたない。それより、適当なケースの分析を実例にできると、ずっと解りやすいんだが、というわけで、手にある困ったケースのご相談をどしどしお寄せください。

現在の教育制度は、例によって日本人の思いつきでなく、戦後改革の一環としてアメリカから導入されたものだ。しかしその実際は当初の予定とは似つかぬものに変質してしまっている。ことは教育に限らない。戦後民主主義そのものもいまはすっかり根腐れちまって、とっくに枚数オーヴァーだけど、

途中ですが、こちらでひと区切り。本当はここからいくつか簡条をとりあげて、詳しくパラ・フレーズするつもりだったんだけど。なかなか予定どおりにはいかないもんだ。なむさん、これまで。ごきげんよう。

* Adults Are Blamable For ... Their Children: Sociological Investigations on Torments, Elementary Education, ed. by HASHIZUME Daisaburo

子どもと大人の違い

——村瀬学『子ども体験』について——

高橋秀明